

I 地形・歴史 Topography & History

1 地形等

市の北部にあたり、阿武隈高地の東麓斜面に位置する。

北部は、屹兎屋山、猫鳴山、二ツ箭山などの山々がそびえ、夏井川が支川の小玉川と三島地内で合流し、地区の中央を北西から南東に流れている。

南側は、平野と丘陵地となっており、平地区の赤井、平窪と接している。

山の緑と夏井川、小玉川の清流が美しい自然に恵まれた所であり、草野心平、櫛田民蔵、国府田敬三郎など諸分野に逸材を送りだした地区でもある。

2 歴史

奈良時代、本市の北半分は磐城郡で、その役所である磐城郡衙が平下大越地区であると遺跡から推定されているが、この遺跡から出土の瓦を作ったのが、下小川の二俣神社にある梅ヶ作瓦窯跡群である。作られた瓦は、夏井川を舟で下って運ばれたものと推測されるが、6世紀頃の当地区は、磐城郡の支配下にあったことが証明される。

延長5年(927)に成立した「延喜式神名帳」には、下小川の二俣神社が登載されている。

11世紀の終り頃、岩城氏が岩城郡の地頭になり、勢力を拡大するなかで、当地区もその支配下になったと推定される。

その後、当地区は常陸守護佐竹氏の一族小川氏に領有され、1320年頃小川(佐竹)義綱が西小川中柴に館を建てたといわれ、また高萩の熊野神社の勧請、下小川の長福寺の開山も、義綱によって元享2年(1322)にされたと伝えられている。

小川氏は、岩城氏の勢力拡大に伴い家臣団に組み入れられ、領地・村落経営の一端を担った。

関ヶ原の戦いの後岩城氏は除封され、代わりに入封した鳥居氏がこの地を治めた。その後この地は細分割され、泉、棚倉、笠間等の各藩領及び幕府の直轄地とされた。

(参考文献:「いわき市史」、「新しいいわきの歴史」)

※行政区域の変遷

